

神の武具を身につけて(5)戦いの目的

エペソ 6:23-24

エペソ人への手紙の最後は、「信仰に伴う、平安と愛が、父なる神と主イエス・キリストから、兄弟たちにありますように。朽ちることのない愛をもって私たちの主イエス・キリストを愛する、すべての人とともに、恵みがありますように。」6:23-24と祝福の祈りで閉じられています。ここには「平安」と「愛」と「恵み」が祈られています。“神の武具を身につけて”というテーマで学んでいますが今日は最後になります。武具とは戦う時に身につけるものです。そして戦いには目的があります。何のために私たちは信仰の戦いをするのでしょうか？ それは神の与えてくださる平安、愛、恵みを体験するためにです。23節に「信仰に伴う」と書かれてありますように信仰者は信仰の戦いをする中で神が与えて下さっている平安、愛、恵みを経験するからです。いくら素晴らしい信仰者の証しを聞いても、深い聖書の説き明かしに納得したとしても、自分自身が実際に神のご臨在、ご真実に触れているかどうかは別のことです。今日は神の武具を身につけて戦う私たちが体験あるいは経験したいと願っている「平安」、「愛」、「恵み」について学び、それを私たちの祈りとしてしたいと思います。

1) 平安

最初に「平安」という言葉ですが、これは「繁栄」とも訳すことができます。ヨハネの手紙第三に「愛する者よ。あなたのたましいが幸いを得ているように、あなたがすべての点で幸いを得、また健康であるように祈ります。」とあるように、「平安」というのは、人が、あらゆる分野で神の祝福をいただいて満たされている状態をさします。聖書でいう「平安」は、目に見ることができ、神の具体的な守りや祝福を指し示しています。しかし、同時に、神の「平安」は目に見える祝福以上のものを示しています。「平安」は「平和」とも訳すことができ、このエペソ人への手紙では「神との平和」という意味で使われていました。エペソ 2:14-16に「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、・・・二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」とあります。神から遠く離れ、神に敵対していた者たちが、キリストの十字架によって、罪の赦しを得、神と和解しました。つまり、神を敵としていた者が神を味方として持つことができるようになったこと。これが神との平和です。この神との平和がなければ、もうひとつの「平安」、目に見える守りや祝福も私たちのものとはならないのです。あるいは一時的な平安を得ても平和が無いとすぐに消えてしまうのです。ヨハネが「あなたの、たましいが幸いを得ているように…」と言っているように、たましいの幸いが先に来て、それから目に見える祝福が伴うのです。

使徒パウロの時代は、大きな戦争のない平和な時代で、その平和は「ローマの平和」(パックス・ロマーナ)と言われました。しかし、この平和は、強大なローマ帝国が武力で国々を従えていることによって成り立っていたものでした。一部の人々は繁栄を楽しんだかもしれませんが、それは決して人々にほんとうの平和を与えなかったのです。ですから、使徒パウロは、「ローマの平和」の時代であっても、キリストによって与えられる本物の平和を告げ知らせなければならなかったのです。今日の私たちも、使徒パウロが生きたのと似た時代に生きています。一見、何不自由なく暮らせているように見えて世界には戦争があり、内乱があり、飢餓があり、災害があり、今はコロナ禍で戦々恐々とした毎日を過ごしています。私たちが考える以上に世界は悲惨な状態にあります。そして、そのたましいには、表面の繁栄とは裏腹に、不安や虚しさ、不満や思い煩いがあるのです。神の平安以外にそれをいやすものはありません。ペリピ 4:7に「そうすれば、人のすべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」との約束があります。多くの人々に神の平安を分かち合うことができるためには、まず自分がこの平安を体験していなければなりません。神の平安を、私たちも真剣に祈り求めましょう。

2) 愛

次に祈られているのは「愛」です。「平安」と同じように「愛」も誰もが求めるものですが、聖書でい

う「愛」は、一般に言う「愛」とは違います。エペソ 6:23-24 では、それは「神からの愛」、「神に向かう愛」、そして「朽ちない愛」だと言われています。

聖書の教える「愛」は、第一に「神からの愛」です。エペソ 6:23 では「信仰に伴う、平安と愛が、父なる神と主イエス・キリストから、兄弟たちにありますように。」と祈られています。「愛」はどこから来るのでしょうか。「父なる神と主イエス・キリスト」から来るのです。ヨハネ第一 4:10 は「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と言っています。愛は人間からはじまるものではありません。というより人間からはほんとうの愛は出て来ません。人間は罪のためにほんとうの愛を失ってしまいました。人間の愛は自己中心なものになってしまい、人に良くしてあげるときでも、自分の榮譽のためや自己満足のためにしてしまうことがあります。「愛」を祈り求めるというのは、人間の愛を高めようとするのではなく、自らにほんとうの愛のないことを認めて、神からの愛を求めることなのです。

聖書の教える「愛」は、第二に、「神に向かう愛」です。「信仰に伴う愛」ということばがあるように、クリスチャンは、信仰によって神の愛を受け取りますが、同時に、信仰によって神に愛をささげるのです。信仰と愛とは切っても切り離せない関係にあります。信仰がなくては愛を受け取ることができません。私たちは信仰によってだけ神の愛を知ることができ、愛の神を受け入れることができるからです。信仰のない愛はほんとうの愛ではありません。しかし、神を信じるとは、神が存在されることを、たんに知識として認めるだけのことではありません。それ以上のものです。ガラテヤ 5:6 に「大事なのは・・愛によって働く信仰なのです。」とあり、コリント第一 13:2 に「たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。」とあるように、信仰は愛によって表現されなければなりません。愛のない信仰も本物ではありません。神を信じるとは神を愛することです。

クリスチャンは、神の愛を受けるだけの存在ではありません。神の愛に応えて神を愛する存在です。聖書では、キリストを信じ、キリストに従う者たちは「弟子」、「兄弟たち」、「信者」、「仲間」、「この道の者」、「クリスチャン」など、さまざまな呼び名で呼ばれていますが、「神を愛する者」というのもクリスチャンに宛てられた素晴らしい呼び名のひとつです。今年のテーマは「神を愛する者となる」ですね。ローマ 8:28 にあります。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」最初の「神を愛する人たち」というのはクリスチャンをさしています。ローマ 1:7 ではクリスチャンは「神に愛され、召された聖徒たち」と呼ばれ、ローマ 8:28 では「神を愛する人たち」と呼ばれています。この両方とも真実です。神に愛され、神を愛する人々、それがクリスチャンです。

聖書の教える「愛」は、第三に「朽ちない愛」です。エペソ 6:24 に「朽ちることのない愛をもって私たちの主イエス・キリストを愛する、すべての人とともに、恵みがありますように。」とあります。ここでもクリスチャンは「主イエス・キリストを愛する人」と呼ばれていますが、どのような愛で主を愛するのかというと、それは「朽ちない愛」によってだということです。この世のものはすべて過ぎ去ってしまいます。人間的な愛も、親切も、善意もやがて朽ちていきます。しかし、神の愛はいつまでも残ります。エペソ人への手紙では、この愛は、キリストと教会との間にある愛として描かれています。エペソ 5 章に、キリストは「キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように」、教会をご自分の花嫁としてくださいとあります。結婚は恋愛とは違って永遠の愛を誓いあうことです。キリストが教会をご自分の花嫁とされたというのは、キリストが永遠の愛、変わらない愛、朽ちない愛を、教会に対して誓ってくださいということなのです。ですからキリストの花嫁である私たちもまた、同じ愛でキリストを愛するのです。神が、まず私たちに求められるのは、私たちが何かができること、神に何かを与えることではありません。全能の神は、私たちの助けなしにすべてのことがおできになり、すべてのものを持っておられる

お方です。神が、なによりも私たちに求められるのは、私たちの神への愛です。神に対して何の感動もない、いわゆる「立派なクリスチャン」よりも、たとえ、弱さや欠けがあっても、神に愛されていることに常に感動し、神への愛がその心に燃えているクリスチャンを、神は求めておられます。コリント第一 16:22 に「主を愛さない者はみな、のろわれよ。」とあります。このことばは、初代教会で聖餐の時に使われていたと言われています。今日も聖餐式があります。聖餐にあずかろうとする者は、自分は神を愛しているだろうか、「朽ちない愛」で愛しているだろうかを点検するよう、呼びかけられたのです。「朽ちない愛」で私を愛してくださっているお方を、心から愛しているかどうかを点検しましょう。

3) 恵み

最後に、「恵み」という言葉を見ましょう。使徒パウロは、どの手紙にも、その最後に「主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」あるいは「恵みがありますように。」と書いています。パウロは、それを単にならわしとして書いたのではなく、こう書き記すことによって、この手紙の主題である「恵み」を再確認しようとしたのです。使徒パウロがエペソ人への手紙で論じてきたのは、じつに「恵み」でした。エペソ 2 章では、神に逆らい、自分の欲望のままに生きていた者が救われたのは恵みによってである、また、神の民とは縁もゆかりもない者たちが、神の民とされたのはじつに神の恵みによってであったと記されていました。エペソ 3 章では、福音に逆らい、教会を迫害してきたパウロが、福音を宣べ伝え、教会を建て上げる使徒とされたのも恵みによってであるとするされています。使徒パウロは「私は、神の力の働きによって私に与えられた神の恵みの賜物により、この福音に仕える者になりました。すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるためであり」エペソ 3:7-8 と言って、神の恵みをあかししています。

エペソ人への手紙は、「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」エペソ 1:2 との挨拶で始まり、「朽ちることのない愛をもって私たちの主イエス・キリストを愛する、すべての人とともに、恵みがありますように。」という祈りで締めくくられています。エペソ人への手紙は、恵みで始まり、恵みで終わっています。そのようにクリスチャンの生活も恵みで始まり、恵みで終わります。私たちのキリストとの出会いはまったくの恵みの出来事でした。キリストにあっての成長や神への奉仕もまた恵みの結果です。そして、地上を去る時もまた、恵みによって、永遠の住まいに迎えられるのです。

ある人が「恵み」を定義してこう言いました。「恵みとは、それを受ける資格のない者に対する神の愛である。」ですから、神の恵みを求める者は、自らが神にふさわしくないことを認めることから始めなければなりません。ちょうど、自分が不安であることを認めなければ「平安」を求めることがなく、自分のうちに愛がないことを認めなければ神の「愛」を求めることもないのと同じです。私たちが聖餐にあずかることができるのは「権利」や「資格」によってではありません。聖餐にあずかる者には、父と子と聖霊の名によってバプテスマ（洗礼）を受けていることが求められていますが、バプテスマもまた恵みによって授けられたものです。聖餐は恵みによって与えられるものです。ですから、へりくだって神の前に出る者が、聖餐によって神の大きな恵みにあずかることができるのです。神は「恵みあれ！」とのことばをもって、聖書に説かれている神の恵みの現実を私たちに体験させてくださるのです。

神の与える「平安」「愛」「恵み」を体験するために信仰の戦いを私たちは戦ってゆきます。そのためには神の与える武具が必要です。この週も様々な戦いを私たちは戦ってゆきます。しかし戦いの先には神の平安、愛、恵みがあることを覚えて主に祈り、より頼みながら歩いてゆきましょう。